

血液がん

(白血病・悪性リンパ腫)

概論

急性白血病の経過は急速で、感染や出血などにより死に至ることも多い。顆粒球性・リンパ球性・単核球性に分類されるが、中国ではこの順に頻度が高い。

悪性リンパ腫は血液がんとして扱われているが、実際にはリンパ組織内の細胞が増殖する疾患である。組織学的には、大まかにホジキンリンパ腫と非ホジキンリンパ腫に分類される。早期では顕著な全身症状は伴わないことが多い。西洋医学の治療は、化学療法・骨髄移植・対症療法が主体となる。

中医学ではその症状から、「温病」「血証」「急労」「血虚」「熱労」「癥積」「痰核」などの観点からアプローチがされている。清熱瀉火・滋陰降火などの治療がなされることが多い。病因病機としては、臓腑の気血陰陽失調・脾腎両虚・気滞・痰濁・水湿・瘀血・癌毒などが重なって起き、痰瘀互結・気血凝滞・耗傷気血などと弁証されることが多い。

中医学の古典には「悪核」「石癰」「石疽」「失栄」「痰核」「瘰癧」などの記載があり、この疾患に相当すると推察される。(平崎)

症例1 | 急性リンパ性白血病

李建生 (北京五棵松中医クリニック主任)

患者：呉○, 18歳, 男性。

主訴：発熱

現病歴：2007年2月, 倦怠感・発熱のため, 河北省の某病院に10日

間入院し、急性リンパ性白血病と診断された。入院後、一時は高熱・ショック症状を呈したが、化学療法2コースを施行した後の末梢血は、WBC 2,500/ μl , RBC $3.06 \times 10^6/\mu\text{l}$, Plt 10.0万/ μl となった。倦怠感や発熱などの症状が続いたため、中薬治療を希望して受診。

現症：倦怠感・発熱・歯肉の出血傾向・口乾・青白い顔色・食欲不振・羸瘦・四肢と体幹の痙攣。二便はほぼ正常。

所見：舌胖大，嫩，歯痕あり。肝腫大は認められず。

中医診断：精虧陽弱・気陰両虚

処方：女貞子 30 g，菟絲子 30 g，枸杞子 30 g，靈芝 30 g，黄耆 60 g，太子参 30 g，白朮 10 g，茯苓 10 g，当帰 10 g，蟾皮炭 6 g，青黛 10 g（包煎），金蕎麦 30 g，甘草 10 g，鷄血藤 30 g，生地黄 30 g，山茱萸 30 g，川芎 15 g，白菊花 10 g，生石膏 60 g，知母 30 g，柴胡 30 g，雄黄 0.2 g（沖服）を7日分処方。

経過

服用後、解熱したが、痙攣の症状は軽減しなかった。痙攣に対して、別に亀板 30 g，鼈甲 30 g，牡蛎 30 g の3味をすりつぶして粉末にしたものを、30包に分けて、1回1包，1日3回，卵黄とともに服用とした。

服用後、痙攣の症状は軽減した。奏効したため、治療内容を変えずに継続した。毎週、症状に応じて加減をしたが、益精助陽の基本方針は変えなかった。その後6コースの化学療法を終えて病状は安定している。痙攣の症状は消失し、倦怠感・発熱も以前に比べると明らかに好転していて、飲食・顔色も良好である。

考察

現代医学では、白血病は遺伝的要素・有害化学物質の刺激・放射能被曝・ウイルス感染などとの関連があると指摘されている。中医学では、この病気は「急労」「虚労」「血証」などの範疇に属する。李建生は「腎は骨を主り、髓を生ず」の理論から、益精助陽の治療を採用して治療効果を得ている。経験上、中薬の併用は早ければ早いほどよく、化学療法の開始と同時に中薬治療を併用すると、さらに効果がよい。

Comment

白血病急性期で、化学療法の3クール目から中薬治療を併用し、化学療法を完遂した。その結果、寛解導入に成功し、周辺症状にも改善を認めている。日本では、このような治療報告はきわめて少ない。自然の生薬には、細胞増殖を抑制する成分が含まれており、白血病の治療に対しても、積極的に西洋医学と併用したいところである。そのためにも、中薬の作用機序を解明する研究が期待される。(平崎)

症例2 | 急性顆粒球性白血病

邵夢揚 (河南中医学院客員教授)

患者：張○, 36歳, 男性。

初診：2006年3月2日

主訴：高熱

現病歴：特に誘因なく、高熱(39℃以上)・鼻出血・歯肉出血が2カ月以上も続いたため、近医にて精査した。WBC 30,000/ μ l, Hb 7.9 g/dl, Plt 3.0万/ μ lで、末梢血液像では多量の芽球を認めた。骨髓像では細胞増殖が活発であり、芽球の比率が70%を超えていた(20%以上で急性白血病と診断される)。抗生物質・ステロイド・止血薬などの対症療法によって、症状はやや軽減した。医師からは、輸血や化学療法などの治療を勧められたが、患者と家族は拒否し、中薬単独での治療を希望して受診した。

現症：体温39℃。発汗・頭痛・口唇の乾燥・口乾・心煩・倦怠感・便秘がある。小便は濃縮尿で、1回量が少ない。

所見：舌質紅, 黄苔が付着。脈は数。元気がない表情。意識は清明。鼻出血・歯肉出血・皮下出血斑・紫斑がある。

診断：急性顆粒球性白血病。血証・熱毒内蘊・迫血妄行・離經成瘀^{*1}

治則：清熱解毒・涼血止血

方剤：犀角地黄湯加減(犀角1g, 牡丹皮15g, 生地黄15g, 玄参15g,

赤芍 15 g, 紫草 30 g, 小薊葉 30 g, 蒲公英 30 g, 鮮白茅根 120 g, 鮮藕節 30 g, 板藍根 30 g, 大青葉 30 g, 地丁 15 g, 土大黃^{*2} 30 g, 甘草 10 g, 焦三仙各 20 g, 生白朮 9 g) を処方。また、同時に八鮮飲^{*3} を服用。

経過

20 日後には、高熱・発汗・頭痛の症状が明らかに改善し、薬と証とが一致していると考えられた。そこで、この処方を病状に応じて加減しながら、続けて 60 日服用したところ、臨床症状はほぼ消失した。患者には 2 カ月ごとの検査を勧めている。

考察

この急性白血病の患者は、虚弱体質で痩せ衰え、倦怠感があるにもかかわらず、発汗・高熱・口唇の乾燥・口乾・鼻出血・歯肉出血・皮下出血斑・紫斑などの症状がある。これは、熱毒内蘊・迫血妄行で、離経の血が瘀となっている状態である。そこで、紫草・蒲公英・板藍根・大青葉・地丁の清熱解毒と、犀角・牡丹皮・生地黄・玄参・赤芍・小薊・白茅根の涼血止血，土大黃の通腑瀉熱，甘草の解毒和中，焦三仙・生白朮の健脾和胃の作用で治療する。これらの薬を合わせ、病機に適合させて用いることで、はじめて清熱解毒・涼血止血の効果を得ることができる。経験上、八鮮飲を併用すると、さらに効果がよい。

- *1 離経成瘀：血脈から漏れ出た血液が瘀血となり，紫斑を形成すること。
- *2 土大黃：タデ科マダイオウの根と葉。清熱解毒・止血・祛瘀・通便・殺虫の効能がある。
- *3 八鮮飲：鮮西瓜皮・鮮荷葉・鮮銀花・鮮扁豆花・鮮竹葉・鮮絲瓜皮・鮮生地・鮮白茅根からなる。暑い時期に暑湿の邪を感じ，邪気が上焦に鬱積し，肺絡を損傷した状態に用いる。

Comment

日本では、化学療法やそれに類する治療を行わずに急性白血病の経過をみることはほとんどないが、本症例のような経過を辿ることは、自然経過ではあり得ない。中薬治療が奏効した可能性があるが、惜しいことに、末血像や骨髄

像の経過が記録されていない。診断としては、おそらく歯肉出血などの症状からは急性前骨髄性白血病が考えられる。この病型では、初発時は全トランス型レチノイン酸とアンソラサイクリン系薬剤が用いられ、再発時ではヒ素が用いられる。ヒ素は、中薬から西洋薬になったものであり、中薬治療とこの病型は関係が深いといえる。(平崎)

症例 3 | 非ホジキンリンパ腫

林洪生（中国中医科学院广安門病院腫瘍科主任）

患者：趙○，71歳，男性。

初診：2002年10月25日

主訴：羸瘦・倦怠感

現病歴：1年前に、右頸部にリンパ節腫大（約1.5×1.2×1.0cm大）を発見し、精査によって腋窩・縦隔・鼠径リンパ節の腫大も認められた。某病院で切除手術を行い、病理診断は「非ホジキンリンパ腫」であった。化学療法を6コース、放射線療法を1コース行い、腫瘍は、いったん消失した。しかし、2カ月前から鼠径リンパ節が腫れ始め、超音波検査では、非ホジキンリンパ腫再発と診断された。高齢のため、手術と化学療法を拒否し、中医治療を求めて受診した。

現症：右鼠径部に約2×1.5×1.3cm大の楕円形の腫瘍塊。表面の皮膚の色は正常だが、腫瘤は硬く、圧痛はなく、可動性もない。疲労倦怠感があり、汗をかきやすい。頭がボーッとしてよく眠れない。咽喉乾燥。

所見：舌紅，舌の前部は無苔で，舌根部は薄黄苔が付着。脈細数。黄土色の顔色。

中医診断：悪核・気陰両虚・痰凝気結・脈絡瘀阻

治則：益気養陰・化痰散結・解毒消瘀

処方：太子参 15g，玄参 15g，黄耆 30g，生地黄 12g，当归 12g，鶏血藤 30g，山茱萸 12g，法半夏 10g，青皮 6g，陳皮 6g，茯苓 15g，白僵蚕 10g，浙貝母 10g，夏枯草 15g，莪朮 10g，鬱金 10g，